



関谷 啓子 新連載

月一回の読書会を始めて5年ほどになる。今は5人のメンバーだが、この人数がとても心地よい。思った事をおずおずと口にしても瞬時に分かり合える安心感がある。

本の好きな人の集まりであるのは当たり前だが各人が実に面白い。

デザインから絞り、彩色迄全工程を一人で仕上げる着物作家、元新聞記者、ベテラン図書館員、朗読者兼相談員そして私といったメンバー。年代もバラバラなら考え方もまるで違う。唯一の共通点は自分のブレない視点を大切にしている事、程よい距離を保ちつつ相手を尊敬している事、そしてお金に対する価値観がほとんど同じである事だ。

70年生きてやっとこのメンバーにたどり着いたなあ～という安堵感はこの私にとって何物にも換えがたい宝物だ。

最近読んだ本は以下のとおり。

シェルコレクター、うたうとはちいさないのち拾いあげ、イシ、私を離さないで、夕凧の街桜の国、マッチ売の少女、幸福の王子、仏菓を得ず、頭痛肩こり樋口一葉、クリスマスの木、月と六ペンス、罪と罰を読まない、切羽へ、悪童日記、歌集「介護日和」「瀬音」「葉脈」「原形」

全く脈絡の無い選定ではあるが、思い

がけなく深い話になったり、作者にファンレターを出したりと十分に楽しんでいる。月に一回、一番贅沢な仲間と一番贅沢な時間を過ごしている。

鶴野祐介 新連載

今年(2017年)3月をもって応用研を離れ、文学研究科に戻ることにしたので、応用研や対人援助学との縁が薄れていくことに一抹の寂しさを覚えていましたが、本誌への連載によってつながりが保てることになり、とても嬉しいです。

うたやおはなしが持つ、人を支え励まし慰める力や、人と人をつなぐ力について、毎回ひとつのうたまたはおはなしを取り上げて、歌い手や語り手や聞き手、さらには私自身のエピソード(体験談)に基づいて考えてみたいと思っています。読者の皆様の、そのうたやおはなし(今回は「食わず女房」です)にまつわるエピソードがあれば次のアドレスまでぜひお寄せください。

<Email: y-uno@fc.ritsumei.ac.jp>

どうぞよろしくお願いいたします。



黒田 長宏 新連載

はじめまして。ここ9年ばかり病院の薬剤部助手として、メッセージ業務という、病院内に入院患者さんごとにセットされた薬のボックスや、ナースステーションごとの書類などを配って行くという仕事をさせてもらってきました。医療関係者の手足と言うような、対人援助業の人の労力を減らすような仕事だと思います。

ですから慎重に行わなければならない面はあるとしても、薬剤師さんや看護師さんから比べれば単純であり最

終決定もしません。病院内を歩く歩数は1万から1万5千歩にもなり、その間、本も読めず、まとまった文章を書いたり、ある部分での『勉強』は不可能です。

そんな時、もっと若い頃に方向性を持って勉強していれば、時間の過ごし方が違っていたらうになあなんて思います。でも、私の作業が無かったら、他の人は大変だろうし、疲れるものな、と思う日々です。病院スタッフは穏和な人が多く、営業を主にしていた時代は長続きしなかったり、個性的に怒りだす人にぶつかったりしていたのに、比較的穏やかに過ごせてきましたから、今の職場に感謝しています。

こうして文章を書かせていただける機会は重要です。よろしくお願ひします。

臼井 正樹 連載第二回

2016年7月26日の相模原障害者施設殺傷事件の余波はまだ残っていて、その関係で複数のマスコミから取材を受けることになった。その一つにNHKがあり1月26日朝のニュースで、ゼミの様子が紹介された。私は学生へのお茶入れ係として短時間だが登場している。そうした中で、障害者施設における支援の専門性がなかなか向上しない現実を改めて認識させられることがたびたびあった。

『介護福祉を巡る断章』というタイトルでこの連載を始めたばかりだが、書かなければならない内容が膨らんできている。今回は、介護福祉と外国人人材の関係についてより深く考えてみたい。

山下桂永子 連載第二回

前回、10年続けている町家合宿について、初めて好き放題書かせて頂きました。書いた後になってみなさんのお目に触れることを想像し、あれがだめだったんじゃないか、これは伝わらないんじゃないか、誤解されるんじゃないかと、自意識過剰の猛反省の日々。恥ずかしくて反応が怖くてたまりませんでした。なので、しばらく周囲には、ネットで無料で読めるなんてことは内緒にしていました(団先生に怒られそうです)。ですが、そろそろ次の締め切りを

意識し始めたころに、ある会議でお会いした、顔見知りの同業者の方に、「山下さん、町家合宿やってるんだってね」とお声がけいただき、そう褒められたわけでもないのに、浮かれてしまいました。というわけで、今回も好き放題書かせて頂きました。10年前にこの町家合宿のことを修士論文にまとめていた時、指導していただいた中村先生や村本先生にもよく「君のは論文じゃない」とお叱りをいただきました。今もあまり変わっていません。乱筆乱文お許しください。

尾上明代 再開第一回

しばらくお休みしていたマガジン執筆を再開しました。以前は、「小さな怪獣たちとのドラマセラピー」(児童養護施設でのセッション)と、ドラマセラピーの手法シリーズを連載しましたが、今回からは高齢者施設での活動を発信します。

今年度は、普段の多忙な仕事と親の介護に加えて、マンション理事の仕事があり、いつにも増して目が回る日々でした。マンションに住んでいる以上、何年かに一回はどうしても回ってくるので仕方なく引き受けますが、やり始めると利点にも気づかされます。普段は会ったこともない住民の方々と交流できたり、よくもこんなにあるものだという「議題」の数々を話し合う中で、現代社会を反映する問題に多く接し、勉強にもなります。

具体的な仕事としては、私は「イベント・植栽」担当で、これまで草取り、植樹祭、避難訓練、クリスマスイルミネーション点灯式などの企画、ビンゴ大会の司会などをやってきました。避難訓練では、皆さんと一緒に仮説トイレを組み立てたり、消防署から起震車に来てもらい、震度7を初体験！揺れることがわかっていて心身の準備をしても非常に怖いことを実感しました。ビンゴ大会は、賞品のお菓子やおもちゃなどを目当てに来るお子さん相手のイベントです。「あれ、このマンションにこんなに多くの子どもがいたっけ?!」と思うほど子どもたちがあふれ返り、「マンション外のお友だち」も全部引き受けて、久々に子どもの大エネルギーに対応して元気をもらいました。4月の引き継ぎ後に、「お役御免」となりますが、今後もできるこ

とは貢献したいと思っています。

・・・ということで、現在の春休みは、自分自身のメンテナンス期間として、ある程度の仕事をしつつも、充実したリラックスタイムを楽しんでいます。見たい映画はたくさんあるし、大好きな食べることもますます意欲を燃やしています。近年、ちょっと食べ過ぎのきらいがあり、(私は見た目よりずっと大食い。)抑えようとしてみましたが、なかなか難しいので、食べる内容を再考し、甘いものを控えたり、野菜料理を多くいただくようにしています。最近のオススメは、落合恵子さんのクレヨンハウスが経営する「オーガニックレストラン・広場」(東京・表参道)です。毎週月曜日は「ベジタリアンマンデー」で、多種の新鮮な有機野菜のお料理が食べ放題。美味しくて動けないほど食べました！

それでは、またしばらく連載におつきあひ下さい。よろしく願い致します。

小池英梨子

2月、突然の不慮の事故で叔母が亡くなった。事故にあってから息を引き取るまでの1週間、お通夜やお葬式の時、大きな悲しみや悔しさが皆を覆いつくしていた。そんな中、11月に生まれたばかりの赤ちゃん(叔母の孫)が空気を読まずに、大きな声で泣いたり笑ったりしてくれることで、場の空気が和んだ。どんなに涙を流しても、みんな赤ちゃんをのぞき込む顔には笑顔を作る。ただただ一生懸命生きていく赤ちゃんに救われていた。



三野宏治

喉のポリープの摘出手術を受けた。7-8ミリの出来物をとるために2泊3日の入院をしたうえ、全身麻酔での手術という万全

の態勢で臨んだ。万全の態勢は万全の態勢であり問題も少ないと考えていたが、実際はちがった。

2泊の入院ではあまり眠れなかった。万全を期すため看護師さんが数時間ごとに巡回に来る。そして懐中電灯の光で目を覚ますのだが、万全を期すため「寝ていませう」というふりをする必要があった。術前は絶食・絶水であったためとてもお腹が空く。術後、安静が解けた後すぐにスナック菓子と杏仁豆腐と春雨ヌードルを問題なく食べた。ただ、病院食は万全を期すためきざみ食とおかゆであった。切ったところは痛みはあまりなかったが、手術時に施された酸素チューブが鼻の中や食道を気づけたようでそちらが痛く血がたまりつらかった。

万全を期すには様々な我慢が必要であることを知った手術だった。

松村奈奈子

今回は旅の話。今年の冬は、夫と3回目のポーランドの旅に。

旅では食事はとても大切な楽しみ。ポーランドは隣国ドイツに似たお料理が多いですが、全体にドイツよりおいしくって安いのも、ポーランドにハマっている理由のひとつです。もちろん、隣国ロシアやウクライナと同様、ポルシチも定番です。

最近は“トリップアドバイザー”のおかげで、“地球の歩き方”にも載らない小さな街を訪ねても、地元で美味しいお店に行きつく事ができます。地元の人に交じっての地元飯は最高です。

スマホのおかげで、海外旅行は飛躍的に楽になりました。見知らぬ街も、迷うことが少なくなりました。京都のタクシー運転手さんから“外国語を話せなくてもスマホ画面で指示されるので、どこに行けばいいかすぐわかるし、助かるわ”とよく聞きます。

ただ、京都の真ん中に住んでいるとよく海外からの旅人に道を聞かれます。“ニシキマーケット(錦市場)はどこか?”“キヨミズテンプル(清水寺)はこの道であってると聞かれて答えると、いつもとっても感謝されるので嬉しくなります。

なので私も、海外では困ったらいろんな人に聞いてみる事にしています。旅での

人との触れ合いはドキドキすることもあるけど、やっぱりあった方がいいかなって思います。

で、今回の旅の1番のお気に入りのメニューを紹介。



肉好きの私達はどのレストランに行っても牛生肉のタルタルを注文。日本ではなかなか食べられないので、毎日のように店を変えて食べていました。レストランで700円ほど。美味しい！

ガヴィニオ重利子

今月から、地元大学が提供する精神医療の訓練研修に参加し始めました。周産期と乳幼児のメンタルヘルスについて、アセスメント方法や発達理論など、多岐にわたる研修が2年間の予定で提供されます。講師には、医師だけでなく心理士や助産師、ソーシャルワーカーなども名を連ね、受講者もまた同様に多岐にわたっています。

日本では、このように異職種が共通の臨床テーマの元に集まる訓練研修をあまり聞いたことがなかったのですが。ディスカッションも事例検討も、それぞれの角度からの発言が聞けて、大変充実しています。最終的には論文を仕上げ、審査発表をするという課程があり、それには少々気が重いのですが。このような貴重な環境と機会から十分な学びを得ることができるよう、まずはこれまた多岐にわたりずらりと課された文献に、恐る恐るあたってみようと思っている今日この頃です。

奥野景子

昨年末に大学時代のゼミの集まりが初めて開催され、それに参加してきた。今まで同窓会的なものに参加したことがない私だったが、なかなか会えなかった同期が何を考えて仕事をしているのかを知り

たくて、行ってみたいと思い参加した。始めは人見知り全開だったものの、エンジンがかかると止まらない。ゼミの先生と同期の子と三人で、色々な話題で盛り上がった。周りにいた現役生は、きょんとした顔をしてしたが、そんなお構いなしで話し続けた。

そして年明け、大学時代から仲良しの子のところへ徐々に遊びに行った。これまで、仕事に関する深い話をしたことがあまりなかったが、その日は、互いが今までにやってきたことや疑問などに関する話題で盛り上がった。

今までは、あまりこのようなことは起きなかった。自分がやっていることや考えていることは、近年のリハビリテーションの王道からは少し外れているように思い、それを話すことに抵抗があったからだと思う。今でも、その抵抗は消えていない。でも、「やっぱり大事やと思うもん！！」と、少し自信を持てるようになってきたのだと思う。そして、話してみるとわかるようになってくれる人や通じる部分がある人もいることがわかったことも、私に自信を与えてくれる。まだまだと思う一方で、これからと思える年末年始になって良かったと思う。2017年になってそれなりに時間が経ったが、今年は、なんだかわくわくする一年になりそうな気がしている。

柳 たかを

マンガ「東成区の昭和・ホイラン」の第3回目を寄稿させていただきました。この作品は、戦後間もない昭和20年代の大阪市東成区が舞台で、8歳上の次兄の思い出話を下敷きにしています。

作中、夕焼け空の彼方から飛来するオニヤンマ(トンボ)の群れをB29にたとえて叫ぶシーンがありますが、次兄は2歳のときアメリカ軍のB29による大阪空襲を経験しています。

私は昭和24年生まれで、幼少の記憶があるのは4歳頃からです。当時の大阪市内はあちこちに野原の空き地がありましたが、あれは空襲で木造長屋が焼けてしまったあとだったのでしょう。昭和40年代の高度成長前で小さな用水路や溜池も多く、流れる水の水質も良くザリガニやメ

ダカの棲家でした。初夏、近所の児童公園沿いの小川で蛍光色の光を点滅させる蛍の群れを追いかけた記憶がありません。

まだテレビはない時代で、当時の遊びは自然(昆虫や魚など)を相手にしたものが多く、このマンガで描いたトンボを捕る遊びもトンボの習性を学び、より良い道具を自作し、捕獲方法も研究することで多く捕れる結果に結びつく楽しさがありました。

学校から帰ったあと、自由に遊べる時間が豊富にあった時代の子供たちの話です。

齋藤 清二

嵐のような修論指導が終わって、春休みに入り、ほっと一息というところである。昨年と今年の2年間修論指導に携わってみて、本マガジンで迷走しながらも私が連載を試みているテーマと、一部の人の修論のテーマとの間に、浅からぬ共通点があるのではないかとということに気が付いた。つまりそれは、一言で言えば、「人間にとって、本当に大切だと感じられるものは、本当に大切なものなのではないか」というトートロジーである。

昨年指導させてもらった、「サブカルチャーを趣味にもつ娘」についての研究や、今年の「複数のアカウントを使いこなすツイッター」についての研究、さらには「ネールアートの持つ力」についての研究などは、そのような問題意識に始まり、「美しい」研究成果を導き出すことに成功しているように思われる。そのような研究からもヒントをもらいつつ、さらに連載を続けて行きたい(同時に学術研究を邪魔しないように気をつけます)。

石田佳子

今回は、スリランカへの旅行と日本への一時帰国が重なり、パソコンを使い難い環境に居たため、投稿をお休みさせていただきました。

スリランカは自然が豊かに残るとても美しい国です。その代わりに電気は貴重品のようで、都会に居ても夜の帳が下りる頃

には街全体が暗闇に包まれて行きます。街灯が少ないため夜の道は歩き難く、コンビニも自動販売機もない上早々に閉まる店が多いので不便でした。

しかし、普段「ある」のが当たり前で気にも留めなかったモノやことが、「ない」環境に放り込まれるのは、貴重な経験になると思います。(スリランカには一応ネットはありましたが)例えばスマホもネットもTV モラジオも…「ない」所では、風の音に耳をすませたり、風景にただ見入ったり、人や動植物と交流する時間が増えるでしょう。

それとは逆に、日本に帰って来ると、(母国語のせいもあり)情報量が爆発的に増えること、物事が迅速に的確に進むこと、人々が携帯ばかり見ていることなどに、最初は戸惑いますが直ぐに慣れて行きます。わざわざ自分で考えたり表現したりしなくとも、「誰か」が作り出した音や映像や言葉やイメージや意見が溢れるほどありますし、「誰か」が整えたシステムに沿うように動いていれば問題なく過ごせるのです。便利な生活は快適で手放し難いものですが、その代わりにいつの間にか受身的になり、主体的、自覚的に何かをする姿勢が薄まって行く危険があるのかもしれない。

しすてむ♪きよたけ

今回から、「清武システムズ」をクリックしていただくと、「SMクラブの受付」ではなく、「清シス・アピール」に変わっております！

いや〜アピールって言ってもですね、何屋か決めて無いので、アピールのしようが無い…。ということで、東京の家、シェアハウスの住人に僕について、話してもらいました。なんか僕、いい人に恵まれてるって自覚をしました！

どうやら、面白い出会いや会話が生まれ、何かよかったね〜ってなったみたい。そんな機能とか、欲してませんか？結構、僕いい人っすよ！今最大限にできること。それは、自画自賛。

小林茂

年末、恒例の行事で北海道好きな親類が遊びに来るので、北海道案内を兼ね

て旅行に同行します。しかし、案内といっても私自身が行ったことのないところの旅行計画を立て車に乗せて移動するというもので、厳密には案内になっていない。今回は、その旅行で周った3カ所の温泉を紹介し(入った温泉は他にもありますが…)。

くっちゃん温泉(ホテルようてい)…富士山のような羊蹄山が見渡せる源泉かけ流しの天然温泉。泉質は、ナトリウム・炭酸水素塩化物泉で透明なお湯です。アルカリ性の泉質なのかぬめりがあり、わずかに硫黄の香りもします。炭酸水素泉ということで泡の粒粒がつくかと思うのですが、微妙な感じ。宿についたのが遅い時間だったので羊蹄山は見え、翌朝も雪雲に覆われ、雪の降る中、露天風呂を満喫してきました。

岬の湯しゃこたん…日帰り温泉のみ。積丹半島の岬近くにある温泉で、丘の上になり、露天風呂から日本海をパノラマに一望できる温泉です。泉質は、ナトリウム一塩化物・炭酸水素塩泉ということで、くっちゃん温泉と同じ泉質？かというところ、こちらはほとんど炭酸がつかない。海が直下にあるからという理由もないが、ずいぶん“しょっぱい”。アルカリ性で、中性高張性高温泉ということで、ぬめりがある泉質です。施設はきれいで、広々とした海の遠方を見ながら解放感いっぱい、なんだか元気が出る温泉です。

盃温泉(潮香荘)…ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園にある温泉。盃温泉郷のなかでは唯一海に面した温泉です。泉質は、石膏泉ということですが、見た目は無色透明の湯です。露天風呂から盃漁港を見下ろし、日本海の風景を一望できます。お風呂はきれいです。宿泊施設はひなびた感じで昔ながらの温泉宿といったところですが。

こんな感じで機会を見て、日ごろの支援の疲れを源泉かけ流しのお湯とともに流すようにしています。

水野スウ

「紅茶の時間」内の草かふえで、「この世界の片隅に」の映画を見た人たちと感想おしゃべり会をしました。誰かと語りた

って気持ちになる映画の時は、よくこんな場を作ります。

私自身、この映画好きで3回も見たけれど、見たあといつも少しもやっとするんです。すずさんの生き方にも少し、それ以上に、見た人たちの反応にもっともやまやしてるのかな、私。



すずさんの、けなげでひたむきなところ、毎日こまやかに工夫して、家族になった人たちと必死に生きようとしてると、暮らしをいねいにいねいに。そこ、いいなあ、大事ななあ、と思う一方で、すずさん、いとしい、めっちゃ切ない！泣いた〜！戦争の場面ででてこないのがよかった、で終わらせてみたいな感想もいっぱい見聞きして、その度、もやもやがふくらんでいたのかもしれない。

集まった人たちと、心に残った場面やせりふをいっぱい出しあいました。この時間がいつも好き。いくつものシーンがあざやかに目に浮かびます。同じもの見ても、感じるところがこんなにも違う、それがおもしろい。

私のそれは、「おまえだけはふつうでおってくれ、まともでおってくれ」という哲さんのせりふ。海軍にはいり、戦うこともした哲さんは、自分の生きてる世界がまともじゃないと、もう知ってしまったんだと感ずる場面です。

もう一つは、8月15日の玉音放送の後、すずさんが煙で泣きながら、「ぼーとした、何も知らんうちのまんま死にたかったなあ」というところ。

あの時代、すずさんはあのように生きるしかなかった、大きな力に抗うことはできなかった。その通りだったとしても、今の私たちがこのせりふですますわけにはいかない、そのことびんびん感じながら見てたんだよ、とこの日のおしゃべり会で言えて、だいぶんすっきりしました。

社会とか政治とか世界とか、そんなめんどくさいこと、何も知りたくないし、関係なく

生きていたいよ。たとえそう思っても、それは無理、関係ない人はいない、ってさすがさんが教えてくれて、それを映画で見ている、入れ子状態の私たちなんだってことです。

今、この世界がどんどんまともでない方向につっこんでいってるから、余計にそう思えたのかもしれませんが。そういうことを感じさせ、考えさせてくれる、という意味でもあらためて、この映画、よかったです。

高垣愉佳

立命館で行われる研究会へと向かう道で、ふと梅の花の香りがしました。その瞬間、まだまだ寒いけれど、そうかもう春が来てるのだなと、春の訪れを感じました。見ると、道沿いの家の前のプランターに小さな梅の花が咲いていました。日本は地理的な条件で、四季がある場所です。が、気候的に四季があることと、日常生活で季節を感じる事がイコールではないという事を姫路に転居して気づきました。四季折々の花、梅も桜も沈丁花もツツジもアジサイも金木犀も銀杏も姫路ではほとんど見かけません。節分祭も地藏盆も除夜の鐘も無く、駅前にはショッピングモールのように年中エンドレスに流れています。寒さと暑さは感じますが、こういう場所に居ると季節を感じるということはありません。自然を壊して作った現代の街において、季節というのは、草花や行事を通じて、意識して日常生活に取り入れて初めて感じられるものになっているのだと気づきました。

中島弘美

対人援助学会研究会より

教育研究委員の中島です。これまでの研究会回数は19回、設立準備活動時期を含めると通算43回です。研究会の準備は、委員長千葉さんと事務局・立命館の山口さんと三人が担当し、開催については、講師をはじめ多くの方にご協力をいただいています。

このたび、会場の手配や当日の会場整備、配布資料づくり等に動いていただいた山口良子さんが、2016年度末で立命館を退任されることになりました。ゲストスピーカーが話しやすいようなセッティングや、参加者の方にとって快適な環境をつくるこ

とに当初よりご尽力いただき、ありがとうございます。この場をお借りしてお礼申し上げます。山口さんは事務局を離れられますが、研究会はこれからも継続し、さらに磨きをかけていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願います。

藤信子

ここしばらく「平家物語」を読んでいる。これは河出書房新社が出している、池澤夏樹＝個人編集の日本文学全集の中の1冊。古川日出男による現代語訳がリズムがよく読みやすい(少なくとも私には)。本屋で見かけて全集の装丁が明るくきれいで手にとってみたところ、面白そうだったので買うことにした。結構重い本でその時は、他に用もあり、持ち歩くのもできにくく、アマゾンで買ってしまった(ごめんなさい、本屋さん)。このごろ忙しくて本屋でほんや見て回ることをしなくなったけれど、やっぱり本屋は行くべきだと思った。新しい出会いがあったし…。こういう本は夜寝るときにしか読めないの、900ページ近くあるのをまだ200ページしか読んでいないけれど、楽しみながら読んでいる。他所で泊まる時には持って行けないのが短所。でも平家物語を読んでいると、なんとなく今の日本も「末世だな」と思う。

中村周平

先日、京都府が行っている観光UD(ユニバーサルデザイン)のモニタリングツアーに参加してきました。行き先は京丹後。普段からあまり外出することもなく、観光目的で出かけることは、ほぼほぼ無い生活を送っている私にとって「ツアー」に参加することは何か新鮮な感じがしました。京都に4台しかないリフト付きの観光バスに乗っていざ京丹後巡りへ…。赤れんがパークや、ふるるファーム(地産地消の食堂)といった舞鶴の観光地を周っていきました。個人的には、引揚げ記念館が非常に興味深かったです。戦後、シベリア抑留されていた方々を昭和31年まで受け入れていた港が舞鶴。京都にいながら全く知らない事実でした。そんな新しい学びもあったモニタリングツアー。たまには、ゆっくり過ごすのも良いのかな。

浅田英輔

今年の冬はほぼ東京で過ごしました。雪の心配がないうえ、天気がよい日が多いんですね。研修の中では、憲法とか行政法とか超高齢化とか人口減少とか地方創生とかそういう勉強をしています。なぜ第三次ベビーブームはこなかったのか。なぜ人は子どもを産まなくなったのか。結婚しなくなったのか。パブルがはじけたからなのか。不況だからなのか。得することがないからなのか。不安が高いからなのか。どれも当てはまるのだろうか。直接的に「子どもを育てなくなる政策」なんてのはないし、そもそも人口を今後も増やすことがいいことだとも言い難い。もうちょっとだけ、苦しい人が減った方がいいなあとは思う。



中村正

最近の研修や講演の依頼先は多様になってきた。しかし、単発の、知識ベースの講座はお断りしている。楽しい研修会となるように考案し、提案しているのはその場の人たちが主体的に参加・参画できるような仕組みの構築や学びの動機づけに資することができるようなカタチである。持続的な自主的企画集団として自走できるようになるお手伝いをするにしている。内容は理論的な事例検討となるように工夫している。一例として大阪府の介護支援課と連携した取り組みがある。家族療法・家族システムのアプローチをもとにして家族のライフストーリーに根ざし、社会的視野を組み込み、さらに男性性ジェンダー論の理解をとおして父親、息子、夫をきちんと位置づけること、それとの相関で、母性や女性性を理解すること、事例を客観視するために理論や概念をとおして社会構造を想定すること等に関する研修を3回程度受けてもらい、その後は二ヶ月に

一度集まり、高齢者の虐待を手がかりにした事例検討を実施するというカタチにした。登録しているケアマネジャーさんは50人程となっている。毎回、大阪梅田の立命館大学キャンパスで開催しているが、事例を虐待のみに焦点化せずにシステムとしてみるができること、業務とはまた異なる人たちと意見交換するので視野が拡大できること等を重視している。議論する姿は楽しそうだ。府内一円から集まる週末の梅田の夜を楽しみにしている。それにつきあう私もとても満足だ。よく似たカタチの勉強会が、出所者支援のグループ、保健所で活動する家族支援グループ、中学生・高校生教育にかかわる警察グループ、子ども虐待にかかわるグループ等とできてきた。

牛若孝治

白い杖を見かけたら、……

京都市内で毎年行われている「白杖安全デー」。私を含め、視覚に障害のある人たちが、普段の日常生活において何に困っているかをシュプレヒコールしながら、京都市内をパレードしている。昨年50回目を迎えたこのパレード。時代とともにシュプレヒコールの文言も変わっていく。だが、どうしても替わらないシュプレヒコールの文言がある。それは、「白い杖を見かけたら声を掛けよう」だ。しかも、この文言が、毎年シュプレヒコールの1番目に登場する。はっきりいって私は、この文言が大嫌いである。これではまるで、「白杖を持っている人たちは可愛そうな人たちだから、お情けで声を掛けてあげよう」みたいな雰囲気は聴こえてならないからだ。

実際にそうだ。あるとき私は、声を掛けてきた人に聞いてみた。「あなたはなぜ私に声を掛けてきたのですか?」。相手はとても言いにくそうな様子。たまりかねた私はまたしても聞いてみる。「あなたは私が白杖を持っているから声をかけたのですか?」。すると相手はしどろしどろながら「はい」と答える。そこで私は言う。「無理に声を掛ける必要ありませんよ。それよりもね、白杖を持っても持っていないでも、「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」など、

気軽に挨拶できる社会を作っていかなあかんでしょう」。

袴田洋子

締め切りをまたもや数日過ぎてしまって、すみません。今日は、2月27日。何のために書いているのか、まったくわからないのですが、こんなことを書く援助職が一人くらいいてもいいか、と思い、書いています。



団遊

アソブロックで、2017年4月に入社する新卒学生を募るために続けていた「コンビ採用」。二人一組でエントリーしてもらい、二人一組に内定を出すという取り組みが、あちこちのメディアで取り上げられ、先日は日テレ系のバラエティ番組に取り上げられました。メイプル超合金というコンビで活躍する芸人のカズレーザーさんが、番組内でアソブロックをプレゼンしてくれていました。真面目に考えた結果の採用手法ですが、その真面目さの中身を伝えたところで、面白くはないなと思っていたら、ちゃんと「オチ」に使ってくれていて、その扱われ方がアソブロックらしくて嬉しかったです。こういう出来事があると、社会の注目も上がり、問い合わせなどが来たりします。アソブロック的採用ブランディング、ということになるのですが、今回本稿では「採用ブランディング」について書きました。

大石仁美

中井貴一 扮する雲霧仁左衛門 を見えています。私はこの手のドラマが好きで、よく見ます。御頭のありよう、物事を見極める冷静さ、知性と判断力、そしてなによりも、信念に基づく義と情の深さです。

盗賊と火付盗賊改めのやりとりも面白いのですが、どちらの御頭も魅力的。リー

ダーの風格とはこういうものかと、ほれぼれしてしまいます。そして、中井貴一も良い役者になったなあとしみじみ思うのです。

このところのアメリカ大統領をめぐる状況はいろいろなことを教えてくれます。その器でないものが、場違いの場所におさまると、とんでもないことになるのですね。

大統領令をどんどん出して、サインしている姿がテレビに映し出されると、これはもう滑稽以外のなにものでもありません。でも、笑えないところが怖い。人類全体に及ぼす影響が、あまりにも大きいからです。

「今の時代は、あり得ないと思っていたことが、ある日、本当に起きてしまうという危険を常にもっている」そのことを心しておかなければいけないと思いました。

インターネット上で、あつという間に情報拡散する社会にあって、雲霧仁左衛門タイプのリーダーを求めることは、もはや時代錯誤なのでしょうか。

村本邦子

週1ペースの映画を自分に課している。結構いい感じだ。たとえばこんなふうに、自分自身の秩序を保持していくことができれば、組織で働くこともできるかもしれない。最近観た中で良かったのは、「エリザのために」「スノーデン」「未来を花束にして」。いずれも自由への闘争か。

國友万裕

先日、男性グループに関わっていた頃に、東京の方のグループで活動していた人とFacebookの友達になりました。彼とはもう15年以上会っていませんでした。彼は物書きとして活躍しています。

17年くらい前、東京の彼の行きつけの飲み屋さんで2時間くらいたづぷり話して、その後ラーメンを食べに行ったことを思い出します。僕はあの当時男の友人を求めていて、だからこそグループに参加したのだけでも、僕とは重ならない人ばかりでした。彼との東京での語らいが最も良い思い出です。

その男性グループは、中村正さんも参加なさっていたのですが、僕は2年間べったり参加しました。しかし、最終的には上手くいかなくなって、グループをやめた僕は、もう彼とも再びつながることはないだろうと思っていました。ところが、最近になって、彼が Facebook を始めたので、突然、「友達かも？」という表示が出ました。僕はグループと相容れなかったのに、彼は僕のことを批判の目で見ていたと思っていましたが、友達リクエストを送るとすぐに承認してくれました。

それからやり取りが始まりました。Facebook や SNS は嫌いだという人もいますが、僕は Facebook で相当多くの人と再会したり、繋がったりできました。今友達は220人。もうほとんど会うこともない人の方が多のですが、繋がっておくといつか会える日が来たりします。新しい友情のツールです。

人間の人生って本当にわからない。そういえば、正さんとも最初は親しいわけではなくて、親しくなったのはこの5年くらい。その一方でもう一生修復することができない関係になってしまった人も何人かいます。

人間関係って面白い。良いと思っていた出会いに憎しみの残る別れが待っていたり、大して親しくならないうちで別れが待っていた人が重要な人になっていたり、本当にドラマです。一つ一つの出会いを大切に生きていきましょう。これからの人生、誰が僕の人生にやってくるのでしょうか。

北村真也

認定フリースクール「学びの森」代表。
(manabinomori.co.jp)

みなさんに長年にわたり親しんでいた「アウラ」「知誠館」の名を、2017年より「学びの森」に変更しました。「学校」でも「塾」でもない「学びの森」という場に繰り広げられる変容のドラマを是非感じ取っていただければ幸いです。

古川秀明

シンガーソングライター

今回、講演会とライブは単に趣味や自己表現ではなく、何かの役割があるのだ

と信じてきたような意味深いものでした。そのことに気付けたのは、この対人援助学マガジンの原稿を書いたからだと思います。今回も書いてよかったと思いました。



西川友理

京都西山短期大学で講師をしつつ、色々と学生支援に関わる事をさせていただいています。

最近何かで『～すべきだ』というのは自分の意見ではない』という一文を見て深く共感しました。先日、40歳になりまして、やっとなんとなく、『～すべき』から距離を置ける時が時々出てきました。と同時に、何を書くにしても、何を語るにしても、「実感のある言葉」「手触りのある言葉」を使いたいと思うようになりつつあります。

社会性のある言葉のお作法を学ぶという意味では、借り物の言葉をつかうことは無駄ではなかったと思うのです。ただ、思いを言葉にする方法を学ぶ機会は、幼いころや若いころに、もうちょっとあってもよかったかな。どうして自分の言葉の土壌を自ら育てたわけでもない花で埋め尽くすようなことをして、そのほうがいいなんて思っていたのでしょうか。たまに生えてきた雑草もわいて出たみみずもいじめてしまうような、まずしい畑を作っていたのでしょうか。このマガジンに書かせていただくことで、なんとなく、自分の言葉の耕し方が分かってきた気がします(7年かけて、やっとなん！)

今からでも遅くはないと信じて、もうちょっと健康で素直な畑を作りたいと思っています。

坂口伊都

2月に熊本の里親支援をしているNPO法人優里の会にお招きいただいて「養育里親になって見えてきたこと」という内容

で話をしてきました。優里の会のTさんとは、京都国際社会福祉センターで、団先生と早桜先生が担当している「対人援助職のための自己覚知—原家族と向き合う」で一緒にさせていただいた時のご縁です。時間をかけて受講者一人ひとりの原家族ととことん向き合う形で、3日間の濃い時間を共にしました。その時からTさんとは似た部分もあって、お互いに親しみを感じていたようです。何年かして、また再会できて素直に嬉しかったです。団先生には不思議な魔力があるようで、いろいろな人の繋がりを自分がいない場所でやってのけてしまうようです。きつと夜な夜な呪文を唱えているのでしょうか(笑)

冗談はさて置き、人の関係とは不思議なものなので自然に関係が続く縁があるのかなと思います。同性でも異性でもそれは変わらないような気がします。何気ない短い会話の中でも心地よさを感じられるといいですね。人の縁の面白さを噛みしめました。

河岸由里子(臨床心理士)

北海道 かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

段々年齢が上がってきて、後継者を育てなければと思う。自分の仕事を譲っていかねばとも考えている。今年度で二つの仕事を後輩に譲ろうと思ったら、結局一つしか譲れなかった。でもまあ一つ減ったと思ったら、仕事が二つ増えた。

マネージメントができていないと娘に注意され、我ながら情けないと反省。でももう受けてしまったものは断れない。今年度よりずっと忙しくなりそうだが、暇を持って余すより良いだろうと自分で自分を慰める。体もあちこちガタが出始めたし、そうそうユンケルの世話になってばかりもいられない。健康第一。さてさて次年度はどんな年になるのか？

岡崎正明

先日「子ども落語会」というイベントに参加した。とはいっても、実際に舞台上立ったのは小1のうちのムスコである。去年偶然見つけた「落語塾」に月1で通い始め、初の本番を迎えたのだ。80人くらいは入っていたと思うが、本人は元々の性格か、

まだそういう感覚が育っていないだけなのか、まったく緊張しなかったとのこと。まあ才能があるかどうかはともかく、楽しめたのとちょっとした成功体験になったのは何よりだった。

ところでこの落語塾。入会から今日にいたるまで、運営が実にいい加減なのである。批判しているのではない。じつに「良い加減」なのだ。

問い合わせの段階から「いつでもどうぞ一。見学で大丈夫ですよ」と、来るもの拒まず。で、行ったら「じゃあ今日は高座名（落語家としての名前）と演目を決めるよ一」っていきなりで(笑)



入会金も会費も無し。高座名で呼び合うから子どもの本名すら聞かれない。唯一親の名前と電話番号を書いたくらいだ。会のルールを説明されたことも無い。親の方も後ろで子どもの練習を見守る程度で、何か特別お世話をするでもない。ただ古参の保護者の中でやれる人が自然に、世話人の方をフォローする程度。

先日の本番も、会場設営やら、ビラやパンフ・小道具の準備など、ほとんど世話人と師匠（落語を教える人。もちろんアマチュア）だけでやっていた。が、そこはやはりプロではないため、連絡ミスとかいろんなトラブルが起こる。それも結構な頻度(笑)。けど誰も責めない。「あの人に任せきりにしちゃダメだよ。ハッハッハ」で終わり。かといって仲間内だけの仲良しグループかと思えば、そんなに密着度も無い。去る者は追わない。基本「やりたい人がやればいい」というスタイルなのだ。

これがスポーツの集まりだったらこうはいかないかなあ。まあなんにせよ、好きなことをやる集団ってこんな雰囲気でありたいなあと思う。

buimen0412@yahoo.co.jp

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職

お寺の本堂で英会話教室をしている。対象は5歳から12歳の子供たちである。教えるのはイングランド出身の人である。彼はイギリスの大学で心理学を勉強したそうだが、今はインターネットでイギリスの大学院の英語教教育学を勉強している。彼は在日10年余りだが、これまで企業内で英語を教えてきた。子供に教えはじめて、英語教育学の勉強を始めた。キッズパワーが彼の生き方に変化をもたらせたのかもしれない。◆なぜ本堂で英会話かというと、子供のお寺離れである。かつてはお寺の境内は子供の遊び場だった。今、お寺から子供の遊び声が聞こえない。何とかしようと、言うことになった。老人たちは、自分たちはお寺でお経を習ったものだ、と言った。今、お経を教えますと言って、子供は来ない。そこで英会話教室と言うことになった。どうせなら、子供たちに本当の英語を聞かせてやりたいと、アルバイト教師を公募して、彼になった。◆企画運営は、専光寺キッズサンガという団体である。専光寺の門徒さんにボランティア活動を頼んだ。会長と住職でアルバイト教師の面接もした。キッズサンガの役員が雇用契約書を作ってくれた。みんなで知恵を出し合って生徒募集をして、子供たちがお寺に来るようになった。先生の給料が払えればいいというので月謝は破格の安さだ。会長と会計は、いつも赤字だと悩んでいる。40代の多忙世代の人たちが、仕事の合間にボランティアで頑張ってくれる。◆税務署から、専光寺キッズサンガはどういう団体であるかを尋ねられた。上記のような説明をした。理解してもらえたが、困ったと言う。宗教法人が営利活動をしているが、利益が出ていない。本来、宗教法人はその宗教行為に関しては非課税である。しかし、宗教法人であっても営利事業をすると課税対象であるし、普通の法人と同じことになる。営利を目的としない営利活動をしていることになって、非常にまれなケースだと言う。想定をしていなかったケースだそう。◆これからの社会の中で、お寺はどのように存続していくのだろう。お寺の将来の不安定さに対して、経済的基盤の確立を求めることが多い。その意味で、お寺はサイドビジネスと言うのが経営多角化に向かうようだ。兼業の宗

教者も多い。サラリーマン兼職の坊さんなど珍しくない。兼職の神職も兼職の牧師もいる。その中で、もうけない英会話教室である。私は専光寺の英会話教室を次世代への投資だと思っている。次の時代にお寺を支えてくれる人たちを育てている。

サトウタツヤ

久しぶりに原稿出せました。本当なら今年の2月はデンマーク、3月はブラジルに行けたのに、、、と思いながら日本でバタバタしています。

川崎二三彦

サイドストーリー

かつて児童相談所でスーパーバイザーの役割を担っていた頃のことを題材にして執筆する「SV・羅針盤のない航海」。連載を始めて早くも1年が経過したが、3か月ごとにメ切がくるというのは、なかなか大変なことだ。というのは、書き始めた頃にはあまり深く考慮していなかった事情が陰しい壁となって、これほど書きにくい原稿、書きにくい連載はかつてないといっているのである。

それはさておき、現在私は、本連載と同様誰に頼まれたわけでもなく、某メーリングリストに、原則として週1回の連載を始めている。

タイトルは「研修講師舞台裏」。ここ数年、各地の研修で講師を依頼されることが多くなったのだけれど、考えてみると、講師の立場でどんな準備をし、どんな振り返りをしているのかといったことを書いている人を見かけることはあまりない。とはいえ、貴重な研修を少しでも有効なものにするには、研修主催者が検討するだけでなく、依頼された講師の側から、感じたこと、考えたことなどをいろいろ発信してもいいのではないかと思いついたのである。

本マガジンに連載している「SV・羅針盤のない航海」が、今後の対人援助に少しでも役立つようにと願って始めたものだとしたら、「研修講師舞台裏」も、目指すところは（主観的には）同じなのであり、だったら会員クローズドのMLに掲載したに過ぎないのだから、「SV」連載のサイドストーリーとして、本マガジンに転載、連載してもいいだろうし、両者が相俟って相乗効果を

期待することもできるのではないかという発想が生まれてきた。

ただし、「舞台裏」の連載は、研修があった週には常に執筆するようにしているので、2 か月あまりで早くも A4 用紙 15 ページの分量になっている。これでは、いかに自由とはいえ量も多く、だらだらしたものにならないかという心配がある。

それに、実は内容もはなはだ恣意的、趣味的なので、果たして対人援助に役立つものかどうかいかがわしい、元へ、疑わしい。

と、ここまで書いたので、そのうちの一部を披露しておこう。

(2017/02/25 記)

*

以下は「研修講師舞台裏」第 10 号の抜粋である。

*

「強烈な寒気が流れ込み、強い冬型の気圧配置になった影響で、山陰地方など日本海側は 11 日、記録的な大雪となった。この雪のため鳥取県では男性 1 人が死亡したほか、列車が足止めされて乗客 26 人が車内で一夜を過ごした」

こんな気象情報がトップニュースで流されるので、私は気が気でなかった。先週 13 日(月)は、鳥取県米子児童相談所主催の研修会が予定されていたからだ。事実、10 日に届いたメールには「本日の鳥取県内の研修、連絡会は延期、中止の状況です」と記されていた。



研修で用いるスライドは、通常、大まかな骨子や基本形を作った後、前日に最後の追い込みにかかることが多い。今回は月曜開催なので、「日曜に仕上げればいいや」と考えていたのだが、中止の可能性が浮かんだ途端、気もそぞろとなって力が入らず、漫然と時間が過ぎてゆく。と、

「予定どおり開催します！」

電話が入ったのは 18 時 32 分。慌てて気持ちを立て直す。

今回の企画は、前半 2 時間の講演と後半 2 時間のパネルディスカッション。講演部分を引き受けた私に与えられたテーマは、「日本の児童虐待重大事例」。「うむ、タイトルが大き過ぎる」とたじろいだのだが、数年前、福村出版から「日本の児童虐待重大事件 2000—2010」という書籍を出していたので、主催者にはそれが念頭にあったのだろう。本書には社会的な反響の大きかった 25 の事例を載せているので、これら全てを紹介できればいいのだが、何しろ事例数が多い。沈黙考、閃いたアイデアが、虐待死の類型ごとの事例紹介である。正直いうと、他に思いつくものが何もなかった。

死亡事例については、虹センターで、「親子心中」に関する研究を行ったほか、現在も「嬰兒殺研究」を続けており、自治体が公表した 150 あまりの検証報告書の分析なども試みていた。その中で、虐待死のパターンによって防止策も違っていることが見えていたので、社会的な関心の高さではなく、これらの類型ごとに事例を紹介したほうが、実務上も役立つと考えたのである。とはいえ、私は現在ほぼ 10 パターンに分類しているので、各 1 例紹介するだけでも 10 事例が必要だ。かつて作成したのも利用しながら準備しているうちに、スライドはいつのまにか 120 枚を超えてしまった。福村出版の本に載せた代理によるミュンヒハウゼン症候群(MSBP)の事例を、「その他」に分類して紹介したことも影響していよう。というのも、後半のパネル討議で扱われる事例が、MSBP と聞いていたので、是非とも加えたかったのである。しかし、これでは到底 2 時間に収まらない。やむなく心中 2 事例をカットして完成させた。

雪もおさまり、研修会は無事開催できたのだが、講演後に司会者が、「今日の講演で、何がよかったか」というと、なにはさておきジェノグラムです。ジェノグラムをこんなふう順次描いていくと、家族のことや事例の理解が深まることがわかりました」と発言したのは予想外だった。とはいえ、たとえば、MSBP 事例のジェノグラム作成では、最初作ったアニメを動かしてみ

て、「これではわかりづらい」と考え直し、アニメーションの順序を一から入れ替えて、それだけでまる 1 日を費やしていたし、他の事例もほぼ全てジェノグラムを用いて説明したのである。内容への言及はなかったものの、一面では努力が報われたという気持ちになった。

さて、後半のパネル討議では、当該事例に関わった病院、児童相談所、乳児院、児童家庭支援センターの担当者が、関わった順にそれぞれの取り組みを報告する形をとっていた。こういうスタイルの発表は他県でも聞いたことがあり、「良好な連携があってこそその方式だな」と思った記憶があるけれど、その印象は今回も変わらなかった。この事例でも、関係機関の距離はかなり近く、密な連携がとれていた。

(以下略) (2017.02.19 投稿)

荒木晃子

前回の対マガ刊行直後、ほぼ同時期に、弁護士への紹介が必要な相談を立て続けに受けた。離婚に伴う子どもの親権問題、離婚後の子どもとの面会交流、(法的には認められていない)生殖補助医療を利用した LGBT カップル関係の問題の 3 ケースである。いずれにもカップル関係及び子どもとの関係が絡んでおり、カウンセリングレベルでの解決が困難と判断した結果だった。

確かに、カウンセリングルームに来室するクライアントは、みな一人残らず“何かに困っている”。しかし、その“困った”が、果たして“心理カウンセリングレベルなのか否か”の確認を忘れてはならないと思う。クライアントの悲しみ、苦しみ、怒り、憤りなどの要因は、もしかすると加害者による犯罪行為が原因かもしれないからだ。一步、見定めを誤ると、クライアントと共に、カウンセラーもまた、被害者にも加害者にもなり得ることを常に自分に言い聞かせた。

過去にも、相談内容によっては、法的解決が必要なケースも担当したが、同時に 3 つのケースを受け持つのは初めての経験だった。また皮肉にも、ほぼ同時期に、自分自身も犯罪行為の被害に遭遇していたことが判明し、11 月後半から最近まで、気

が晴れる日はなかった。年末から何かと不調が続き、つい先日、やっと回復に向けて動きだしたところである。結果として、自分の問題が解決したわけではないのだが、少なくともクライアントたちはよい方向に向かっているの、これでよしとしようと思っている。

さて、いよいよ今年も還暦。まあ、ぼちぼち行きましようかね。

鶴谷主一

年度末になると追われる仕事がある。写真作業だ。

専門に撮ってくれる写真屋さんもいなかったの、ずーっと前から僕が写真を撮ってきた。フィルム時代には、お泊まり保育や運動会で最高に撮ってフィルム 10本、36枚撮りで360枚だった。年間で2,000枚ぐらいだろうか、それでも整理は骨が折れた。

時代はデジカメに移り、最初こそフィルム時代より増えたなあ、と思っていたが、ここ数年は毎年1万枚ペースで増え、今年はずでに5万枚を超えている。園児は減っているのに枚数は膨らむ一方だ。

PCに入りきらないので1TBの外付けハードディスクに入れているけど作業を始めると、子どもたちの表情がかわいくて時間を忘れてしまう。

ハッと気づくと他の仕事が進んでいない！年度末で忙しいのに…

何枚もシャッターを押した自分が恨めしいこの頃です。

原町幼稚園

<http://www.haramachi-ki.jp>

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

木村晃子

新しい春に

節目の4月がもうすぐだ。節目の春。

この時期、職場を去る人、新たに入ってくる人などがいる。それぞれの春の背景に、悩みが隠れていることも多い。

最近の若い人は…という定型句は昔からのつきものだ。私が思う、最近の若い人は、とてもお利口さんだ。仕事も一生懸命、愚痴の一つも言わずに働いている。

でも…ここが災いしていることが多いと感じる。一人で悩み、一人で決断する。決めてしまう前に、たくさんの人の意見を聞いていたら、きっと、抱える悩みが、通り道の石ころや、少し長く感じる登り坂だということが見えたかもしれないのに、と。

最近の若い人は、で始まる否定文は、先を生きている人間の責任転嫁だ。新しい春、若い人の役に立てるように、少しお節介になってみよう、心に誓った。そして、悩んだり迷ったりして決断した道を、どうぞお大事に…と、祈りつつ。

乾明紀

短信は体の不調を書くことが恒例になっていますが、最近の不調は原稿を完成させるために予定していた2日間を風邪で寝込んでしまったこと、首と肩甲骨部分のハリです。前者は一過性のものですが、後者は慢性的なもので、もう何年もスツキリすることがありません。

ある整体師によると、その理由は背骨の歪みだったのですが、最近通院した整体師からはリックサックの重さを指摘されました。通勤途上の電車の中で仕事するためにパソコンや本、さらには愛妻弁当と水筒をリックサックに入れるため、結構な重さになっていました。ということで最近、駅まで自転車で通うことも止め、キャスター付きのカバンで通勤するようになりました。



三嶋 あゆみ

友人も大好きな作曲家のコンサートを、京都芸術センターが主催するという情報をキャッチ！

友人を誘うために、ワクワクしてセンターに保育を問い合わせたところ、ないとの返事。市の施設なのにと驚きました。

働くこともアートに触れることも生活の一部なのに、子育てを理由に制限されるって本当にひどい。一緒に聴いた友人の感想、聞きたかったな！

見野 大介

気づけば2017年も2ヶ月が過ぎようとしています。元旦以外の日は全部仕事してたような気が…。

1月は東京の三軒茶屋で豆皿展と、大阪のあべのハルカスでの3人展がありました。ハルカスでの3人展では同じ日程で隣の会場にて、水森亜土さんの個展が開催されてました。水森亜土…正直どなたか分からず。サイン会もあったのでご本人も見ましたが、周りの人達の興奮ぶりに付いていけない自分がいました(笑) 2月は東京の吉祥寺にて2人展があります。この原稿を提出した数日後には吉祥寺に出向いています。色んな出会いが生まれることを願います。3月は奈良の東大寺近くにて2人展、4月は京都の烏丸三条近くにて個展、5月は愛媛の松山にて個展、6月は東京の南青山にて個展と徳島にて蕎麦猪口展が控えています。うーん…乗り越えられるんやろか、この日程(笑)

団士郎

現在(2月末日)、京都国際漫画ミュージアムでFECO JAPAN マンガ展を開催中。3月14日までだが、その日から19日まで京都寺町御池の余花庵ギャラリーで恒例の「ぼむ」マンガ展が始まる。

同時並行的に今、香川県さぬき子どもの国とで「木陰の物語」マンガ展が開催中。そして3月末には、奈良・広陵町図書館で「木陰の物語」マンガ展。4月2日からは宮城県石巻市の石の森章太郎萬画館で「家族マンガ展」が開催される。何だか急に漫画家として売れっ子なのである。

とはいいいながら、三月末にはポーランドに行こうと思っている。ずっとアウシュビッツの事が気になっていた。べつに調査したいとか、研究したいというのではない。例によって、この世界にあるもので、気になっているものは見ておこう…程度のことだ。

強制収容所のことは歴史的事実やスキヤンダラスな人物、エピソードなど、山ほど耳目にしてきた。映画も文学も、ドキュメンタリーもたくさん見た。「夜と霧」はアラン・レネ監督の映画を、50年近く前、学生会館の上映で見たのが最初だ。フランクルの著作は後になって読んだ。

だからいつか行きたいとは思っていたが、なかなか機会は訪れなかった。旅行好きの私はその周辺(ドイツ、チェコ、ハンガリー)には出かけているのにポーランドが抜けている。

だからもう、機会があったらではなく、機会を作ることにした。とは言っても、一から計画、準備しては大変だ。そんなとき、格安のツアーを見つけた。ポーランド周遊8日間。「てるみくらぶ」という、新聞広告で近年話題の旅行会社。アウシュビッツは選択観光地の中に入っている。希望されない方はクラクフをゆっくりご散策くださいとある。

この会社、ヨーロッパ方面はどのツアーも、エミレーツ航空利用、関西空港発深夜便らしい。妻はこのところ飛行機NGなので、パッケージツアーへの一人参加を選んだ。大昔、「シルクロードの旅」に参加した時以来の形だ。

久々に一人旅も考えたが、準備時間のゆとりが全くなかった。このご時世、暇人元気高齢者ばかりのツアーじゃないの? と思っているが、また機会があれば報告します。

千葉晃央

伊丹空港(大阪国際空港)のある大阪豊中市で育った私は、住民による騒音公害の歴史に触れることが多かった。関西開港前のジャンボジェット機が飛び交う空の下では、冷房付き、2重サッシの教室でなんと子どもたちは授業を受けていた。

伊丹空港での大型ジェット機の運用をとりやめ、空港の利用時間を制限するのは都市に立地する空港の宿命ともいえる。秋田本社の会社に勤めていて、当時大阪支社にいた父は、伊丹空港から秋田へ飛行機でよく行っていた。伊丹空港から車で15分のところに住んでいた私は、免許取得後、車で父を迎えに行くことも度々あった。関西開港後は多くの便が関西のみと

なり、秋田行も伊丹空港発がほとんどないような時期もあったように思う。しかし現在はすべてが伊丹空港発である。先日、そんな父に言われたのが「最終便には乗らない」というセリフだった。

2月某日、秋田から京都に帰る私はJALの最終便を予約していた。入院中の父と、病院に付き添う母と一緒に過ごす時間が少しでもあるとよいと思ったからである。休みが少ない私には一泊で帰るのがスケジュール的に精一杯。17時過ぎ秋田空港に着くと前便であるANA伊丹行がすでに出発時間を過ぎていないのに飛び立っていない。それどころか、飛行機が到着していない。



当日は春一番が吹いたといわれ、強風等で天候が荒れていた。秋田空港で待っているとJALからアナウンス。伊丹空港には入港制限時間があるため、伊丹ではなく関西行に変更となること、そして前便のANAに振り替え可能でANAなら入港制限時間21時に間に合う可能性があるとのこと。伊丹空港に車を置いていた私は伊丹に戻らねばならない! 当然ANAに振り替える。19時過ぎに秋田空港を離陸。機内から外を見ると雷が鳴り続けている。プロペラ機、強風、夜間の飛行ルート制限にも



引っかけり、上空で伊丹行から関西行に

変更…。いつもなら1時間40分程度で秋田から大阪には到着する。結局、その日は21時55分に関西に到着。約3時間のフライト…。長すぎ。

ANAは関西から伊丹空港までの交通費2000円を乗客に配布。それをいただいて、関西から伊丹行のリムジンバスに乗るためにチケットを買って並ぶ。当日は同じようなことがあちこちの便で起きていたため長蛇の列。外国人の姿も多い。けれども私の10人ほど前でバスがいっぱいになり、乗れないことに、そしてそれが最終便であると知る…。あわててバスチケットの払い戻しに向かうが、人が並び、その窓口にも人影がない。あきらめて別の窓口を見つけてやっと払い戻し。電車に変更。南海電鉄とJR、どちらにしよう。南海は難波までしかいかない。夜中まで電車が走っているのはJR! というイメージでJR関西快速で天王寺駅、環状線で大阪駅に。時間はすでに24時。阪急宝塚線の最終普通「雲雀ヶ丘花屋敷行」に何とか乗車。

この終電、豊中在住時代に何度かお世話になった。そして各駅停車で蛸池駅に到着。すでに深夜1時。蛸池駅から伊丹空港へはモノレールで一駅。当然ないので歩く! 過去に空港まで歩いたのは20数年前。土地勘があつてよかった! 何とか真っ暗な伊丹空港に着き、車で京都へ。秋田の実家を出てすでに10時間がたっていた…。京都から秋田に行くときは4時間で着いたのに! 深夜に働く人々、仕事帰りの乗客、緊急時に対応する方々の姿が焼き付いた深夜のヒヤヒヤな長旅。翌日は朝9時から仕事。「最終便には乗らない」できるだけそうします、父上!

大谷多加志

14年前、今の職場に就職してすぐの頃、話の流れで四柱推命の占いをしてもらったことがありました。結果の紙には色々なことが書かれてあつて、納得することも、「へー」と他人事のように感じることもありましたが、1つ記憶に残っている一文があります。『兼業に向きます』。就職したての新人にはどう受け取っていいかわからず、職場に対してもなんとなく不義理(?)なような気もした記憶があります。

今の職場は、人の数より部署の数の方が多いところがあるので、基本色々な業務を兼持ちすることになります。そんな働き方が嫌いではなかったので、それが兼業に向くということなのだろうと思っていました。

昨年はさらに職場外でも仕事の機会を頂いて、人生初の確定申告をすることになりました。一応、名実ともに兼業人になったということでしょうか。軸足はしっかりおかせてもらっている安心感と、好きにさせてもらっている自由もあるというのは、恵まれていると思います。

この対人援助学マガジンでも、自由な場を与えて頂いて、ダブル連載という兼業(?)を2年半にわたってさせて頂きました。19号から始めた「知的発達障害の家族の日々」は10回目を迎えた今回で、いったん区切りをすることとしました。「K式発達検査をめぐって」は続きますので、引き続きよろしくお願いします。



馬渡徳子

今回、投稿をお休みさせて頂きました。「ギックリさん(三度目のギックリ腰なので、ちょっとチャームングに呼んでます)」になり、自分を労わってやらないといけないう事態に追い込まれました。

二月当初より、同時期に、家族の手術、入院が重なり、睡眠時間も食生活も無茶苦茶になっていたことも誘引。駆け込んだ

かかりつけ医師に一喝!「痩せなさい。何か運動してる?」私「はい。平和運動と社会保障改善運動と労働運動と…ニコッ(笑)」ムツとした医師にマジで叱られ、「ギックリ腰で来たのに…」という陰の声は伏

せて、ここは大人しく、管理栄養士と理学療法士による生活指導を受けることに。

しゅんとして、おりこうさんにしていると、同居の姑が元気になり、別居家族の優しいこと優しいこと。「私は、年を重ねる毎に、ちょっとずつ、しおれていく方がいいなあ」と、厚生労働省の施策に、ちょっと反論したくなりました。

皆さんも、「お世話され上手」になりましょう。

浦田雅夫

学生に締め切りを守るように言いながら、守れていない我が身にブーメラン。見通しを立てて計画的にやらないと周りに大きな迷惑だと反省です。

3月19日(日)東山にある京都府家庭支援総合センターにて、午後、社会的養護後の支援についてのシンポ(進路の課題)を行います!ご興味のある方はぜひお越しください!